子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Neonatal transfer and duration of hospitalization of newborns as potential risk factors for impaired mother-infant bonding: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル：

新生児搬送と子どもの入院期間がボンディング（対児愛着）へ与える影響

ユニットセンター（UC）等名：甲信ユニットセンター（山梨）
サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：Journal of Affective Disorders
年： 2024　DOI：10.1016/j.jad.2024.06.001

筆頭著者名：篠原　諭史
所属 UC 名：甲信ユニットセンター（山梨）

目的：

本研究では、これまで世界的に見てもほとんど検討されたことがない、新生児搬送と子どもの入院期間が対児愛着に与える影響について、エコチル調査のデータを用いて解析を行いました。

方法：

研究同意を得てエコチル調査に参加した妊婦のうち、欠損データのない 66,402 名のデータを用いて解析しました。対児愛着については、生後 1 年の時点で MIB スケールという質問票を用いて評価し、5 点以上を愛着形成障害と定義しました。新生児搬送と子どもの入院期間と愛着形成障害との関連を多重ロジスティック回帰分析で検討しました。また、児の入院期間の愛着形成障害の予測能についても検討しました。

結果：

愛着形成障害は全体の 11.2%でみられました。新生児搬送と子どもの入院期間はともに、生後 1 年の時点での愛着形成障害のリスク因子であることがわかりました。しかし、子どもの入院期間の愛着形成障害の予測能は非常に低いこともわかりました。

考察（研究の限界を含める）：

新生児搬送による早期の母子分離は子どもの愛着形成障害に影響を与える可能性が示唆されました。子どもの病態と相関すると考えられる子どもの入院期間の愛着形成障害の予測能が低いことから、子どもの重症度に関わらず新生児搬送を要する状況自体が愛着形成障害に強い影響を与える可能性が示唆されました。研究の限界点としては、母親の虐待された経験や子どもが NICU に入院となったかどうかが解析に加えられていないことが挙げられます。

結論：

子どもの入院期間に関わらず、新生児搬送を要した母児については最低でも生後 1 年までのフォローができる社会体制が必要と考えられました。